

詩編 98 : 1~3

ルカによる福音書 22 : 39~46

「祈り」

【前奏】

【招詞】 詩編 33 : 1~5

【祈祷】 司式長老

【聖書】 詩編 98 : 1~3、ルカによる福音書 22 : 39~46

【説教】「祈り」

<祈り>

今日の箇所は、イエスさまがユダに裏切られ、捕らえられ、十字架に架けられるその直前に、祈られる場面が語られています。

「オリーブ山で祈る」と小見出しに書かれていますが、他の福音書では「ゲツセマネの祈り」と言われているところです。そちらの方が聞き覚えがある方も多いでしょう。ルカによる福音書の著者は、ユダヤ人以外の異邦人の読者に読まれることを意識していましたから、ローカルな聞き慣れない地名をあえて省いたのかも知れません。

さて、今日の直前までは、イエスさまの最後の晩餐の場面が語られていました。

そこでイエスさまは十二人の使徒たちに、ご自分の身にこれから起こること。つまり十字架に架けられて死ぬということは、神さまの救いのご計画のために、すべての人の罪の贖いのために、実現しなければならないことなのだ、ということをお教えされました。

そして、イエスさまの十字架の際に、弟子たちがサタンのふるいにかけてられるということ。大きく、激しく揺さぶられて、彼らの信仰が本物か、偽物かが明らかになるだろう、ということをおっしゃいました。だから、そんな彼らの信仰が無くならないように、イエスさまが祈って下さった。そのようなことが記されていたのです。

今日の所からは、場面が変わって、その最後の晩餐の席から、イエスさまがいつも祈っておられた場所、オリーブ山に移ります。

ここでは、弟子たちが「誘惑に陥らないように祈りなさい」とイエスさまに命じられたにも関わらず、眠り込んで祈れなくなってしまっている姿。そして、汗が血の滴るように地面に落ちるほどに、熱心に祈られるイエスさまのお姿が、対照的に語られています。

今日の御言葉は、祈れない弟子たち、そしてわたしたちに、イエスさまのお姿を通して、どのように祈ればよいかを教えようとしているのです。

## <弟子たちの姿>

さて、今日の所でイエスさまは弟子たちに、二度、同じことを命じられました。

40 節「誘惑に陥らないように祈りなさい」

46 節「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

これから十字架へ向かわれるイエスさまです。そして、その中でサタンのふるいにかける弟子たちです。

サタンとは、神さまからわたしたちを引き離そうとする力、神さまを疑わせ、恵みから遠ざけようとする力のことです。そして「誘惑」もまた、「サタンのふるい」と同じ意味と捉えて良いでしょう。誘惑はわたしたちに、苦しみや試練を通して、あなたは神を信じることなど出来ないのだ、神に頼っても仕方がない、救いなどないのだから、自分の力で何とかしなければ、とわたしたちを罪へと誘う力です。

もうすぐ弟子たちは、その信仰が本物であるかを試され、信仰の戦い、サタンとの戦い、罪の誘惑の力に、直面させられるのです。

そのような弟子たちに、イエスさまは、この信仰の戦い、サタンとの戦い、神さまから引き離そうとする誘惑の力に、祈りによって対抗しなさい、と仰っているのです。

祈りとは、神さまとの交わりのことです。神さまと対話することです。心を、思いを、神さまの方に向け、神さまの御言葉に耳を傾け、神さまの御前に立って、わたしはここにいます、と応答することです。

つまり、祈っていることそのものが、神さまに近付く行為であり、神さまから引き離そうとするサタンの力に抵抗するものとなるのです。わたしたちが神さまに祈り始めたその時に、もうサタンは敗北していると言って良いでしょう。

ですから裏返せば、祈らないこと、祈れないこと。これが、わたしたちにとって、どれだけ危機的なことか、どれだけサタンに対して無防備なことであるかが、分かると思います。

神さまの方を向かない。神さまに近付こうとしない。神さまに求めない。神さまに信頼しない。神さまに祈らない。それこそ、「眠り込んでいる」ということであり、目覚めて祈ることの反対の状態なのです。

45 節には「イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」とあります。

「彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」切なくなるような文章です。

それはこの世に起こる、自分の身に起こる、様々な出来事に耐えることの出来ない、弱さや限界を持つ、この生身のわたしたちの悲しみ。その悲しみの果てに、弱さの果てに、疲れ、くたびれ、もはや祈れなくなってしまう。目を覚ましていられず、神さまを見つめていることが出来ず、信仰が眠り込んでいるようになる。

それが、「悲しみの果てに眠り込んでいた」弟子たちの状態だったのではないのでしょうか。

そうして祈ることをやめた、無防備な彼らは、この後、サタンのふるいにかけてられ、誘惑に負け、自分で自分を守ろうとし、イエスさまから離れていってしまうのです。

<イエスさまの祈り>

しかし、このような弟子たちの中で、神の御子であり、まことの人となられたイエスさまただお一人が、目を覚まし、父なる神さまに祈り続けておられました。

イエスさまは、神の御子でありますから、まことの祈りをご存知です。

そして、まことの人となられたお方ですから、弟子たちの、わたしたちの、どうしようもない悲しみ。誘惑に耐えられず、祈ることが出来なくなる。目を閉じて眠り込んでしまう。そんな、どうしようもない弱さや限界をも、よくご存じでいて下さるお方です。

41 節以下には、イエスさまの祈りのご様子が、このように語られています。

「そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。『父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。』」

[杯を取りのけてください]

当時、祈る姿勢というのは、立って、手を広げ、天を仰ぐようなスタイルでした。ですから、ここであえてイエスさまが「ひざまずいて」祈られた、というのは、いつもと違う、特別な姿勢であった、ということです。膝を折り、身を低くして、神さまの御前に堂々と立つというよりも、倒れ伏すようにして祈られた。

「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」

父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。

父なる神さま、もしあなたのご計画に沿うならば、あなたの御心に適うならば、この杯を、この苦しみを、取りのけてください。イエスさまは、そう祈られました。

イエスさまは、ご自分が受けなければならない十字架の死を、「この杯」と言われました。そして、この十字架の死は、成し遂げられなければならないことであると、繰り返し語って来られました。しかし驚くべきことに、御心なら、それを取りのけていただきたい、と祈られたのです。

「杯」とは、旧約聖書に「神の怒り、審き」を表すものとして出て来ます。エレミヤ書にはこうあります。(エレミヤ 25 : 15~18)

「それゆえ、イスラエルの神、主はわたしにこう言われる。『わたしの手から怒りの酒の杯を取り、わたしがあなたを遣わすすべての国々にそれを飲ませよ。彼らは飲んでよろめき、わたしが彼らの中に剣を送るとき、恐怖にもだえる。』わたしは、主の御手から杯を取り、主がわたしを遣わされるすべての国々にその酒を飲ませた。」

イエスさまがこれからお受けになることは、単に肉体の痛みや、苦しみや、死ぬ、ということだけではありません。イエスさまがこれからその身に受けられるのは、「神の怒り」、「神の審き」なのです。

イエスさまの十字架とは、本当はわたしたちが、自らの罪のために受けるべきであった神の怒りを、神の審きを、一身に身代わりとなって引き受けて下さることなのです。

わたしたちは、この神の審きに耐えることが出来ません。わたしたちは、この命をすべてささげても、神さまの御前で、自分の罪を償い切ることが出来ません。そのために、ただ怒りに触れて、滅ぼされるばかりなのです。

しかし、神さまは、わたしたちがただそのように罪に滅びていくことを良しとされず、わたしたちの罪を赦し、新しい命を得させるために、御自分の独り子を遣わし、この方の上に、わたしたちの罪の裁きを、すべて負わせられたのです。

その神の審きの恐ろしさを、苦しみを、滅びを、神の御子イエスさまはよくご存じです。御心ならば、それを取りのけていただきたい。肉体を持ち、弱さをまとわれ、わたしたちと同じになられたイエスさまの、心からの祈りでした。

わたしたちもまた、祈ってよいのです。神さまに問いかけてよいのです。苦しみを取り去って下さい。悲しみを遠ざけて下さい。この戦いから、逃れさせて下さい。これが御心なのでしょうか。受け入れることは、わたしにとって、とても困難なことです、と。

そのように、心の内を、神さまの御前に、すべて打ち明けて良いのです。わたしの思い、わたしの願い、わたしの心を、父なる神さまに、知っていただいて良いのです。

神さまの御心、ご計画を受け入れることが困難であること。神さまがなそうとしておられることと、自分の思いが一致しないこと。ここにこそ、わたしたちの激しい信仰の苦しみ、戦いがあります。そして、ここにこそサタンは付け入ってきますし、誘惑は、神にではなく、自分の思いに従えばよいではないかと、罪に誘うのです。

このような時にこそ、祈らなければなりません。

[御心のままに]

しかし、最も大切な祈りは、この後、イエスさまがこう仰ったことなのです。

「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」

わたしたちは神さまに、自分の願いを叶えてもらうために、自分の求めを満たしてもらうために、祈るではありません。

わたしたちが願うべきは、このわたしの思い、わたしの願い、わたしの心がある。しかしそれらをすべてご存じで、それらをすべて包み、それらをすべて御手に置いて下さる、神さまの御心こそが、行なわれますように、ということです。

神さまは、まことに神であります。愛に満ちた、憐れみに満ちた方であります。すべての罪人を救うために、どのような者の罪をも赦すために、死ぬ者を生きる者とするために、救いのご計画を成し遂げて下さる方であります。

そのような神さまの御手に、すべてを委ねます。あなたが成そうとしておられることへ、わたしの思いも、心も、願いも導き、あなたと一つにならせて下さい。

これが、イエスさまが祈られた祈りだったのです。

神さまの心とわたしの心が、一つになること。神さまとわたしが、共にあること。これが、まことの祈りです。これが、わたしたちが祈り求めるべきことなのです。

わたしの思いが、神さまの思いと同じならば、御心ならば、そのようになるでしょう。

しかし、そうでないのなら、わたしの願いではなく、あなたの願われることをして下さい。あなたの御心のままに行なってください。あなたの御心こそが、最も正しく、最も良いものであり、最も愛と恵みに満ちたものに、違いないのですから。

…そのように、自分のこれからのことも、肉体的なことも、心も、思いも、願いも、命も、すべて神さまの御前に注ぎ出すのです。そして、神さまに信頼し、すべてをその御手の中に置いていただくのです。

このような祈りの中に、サタンの入る余地があるでしょうか。誘惑に、試みに、罪に流される余地があるでしょうか。

イエスさまはこのような祈りによって、父なる神さまの御心に、自分の思いを、願いを、そしてこれからの歩みをすべてお委ねになり、信仰の戦いに打ち勝たれたのです。

#### [熱心に祈る]

44 節に、「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた」とあります。

この「苦しみもだえ」という言葉は、ただ、死の恐れや、不安や、心の苦しみに悶えて、ということではありません。この言葉は、戦いに勝つために、苦しんで練習したり、努力したりする、という意味から来ているそうです。他の箇所では、「熱心に」と訳されたり、「戦い抜く」と訳されたりしています。

つまりイエスさまは、苦しみもだえるような信仰の戦いに勝利するために、非常に熱心に祈り、そして最後まで戦い抜かれた、ということなのです。

そうして、45 節には「イエスが祈り終わって立ち上がり」とあります。

イエスさまは祈りを終えられ、ひざまずいているところから、立ち上がられた。この「立ち上がる」という言葉は、「復活する」「よみがえる」とも訳されている言葉です。

神さまの御心は、神さまが望んでおられることは、すべての者が受けるべき怒りの杯を、神の審きを、十字架においてイエスさまお一人の身に負わせ、すべての者を罪と死の中から立ち上がらせることです。滅びるべき者に、倒れ伏している者に、復活の命を与え、神さまの御許に立つ者とするのです。

イエスさまは祈りを通して、その御心と一つになられ、立ち上がられたのです。

十字架から、復活へ至るために。死の中から立ち上がられるために。そうして、わたしたちを立ち上がらせるために。ご自分の思いを、父なる神さまの思いと一つになさり、立ち上がられたのです。

だからこそ、この後イエスさまは、はじめに取りのけていただきたいと願われたその杯を、お受けになって下さいました。そのようにして、父なる神さまの御心の通りに、イエスさまは十字架で死に、そのようにして神さまの救いのご計画を成し遂げられたのです。

そして父なる神さまは、このようにして御心に従われたイエスさまを、死者の中から復活させ、まことの命へと立ち上がらせて下さったのです。

神さまの御心は、必ず勝利へと、栄光へと至ります。すべての御業は、ご計画は、必ず愛によって、憐れみによってなされます。この父なる神さまの御心を、信じる事が出来ること。自分の思いが、御心へと引き上げられ、一つにされること。それこそ、祈りが聞かれる、ということなのです。

[御心をなさせたまえ]

ところで、わたしたちは、ルカによる福音書 11 章で、イエスさまが教えて下さった「主の祈り」を学びました。しかし、実はそこには、「御国を来たらせたまえ」の次にくるはずの、「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」との祈りが省かれていたのです。

しかしルカは、今日のこの箇所、「御心をなさせたまえ」という祈りを、イエスさまを模範として、もっとも深く、もっとも丁寧な仕方で、わたしたちに伝えました。

そしてルカは、イエスさまの十字架と復活が実現したことを述べ、神さまが必ずその御心を成し遂げて下さる方であることを、わたしたちにはっきりと証言したのです。

<復活のイエスさまにあって祈る>

さて、そうして祈りが終わって立ち上がられたイエスさまは、戻って来られて、悲しみの果てに眠り込んでいる弟子たちを見つめられます。そして言われたのです。

「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

イエスさまは、弟子たちに祈るようと命じられます。誘惑に対抗するには、サタンに打ち勝つには、神さまに祈るしかないのです。

しかし、弟子たちは、そしてわたしたちは、どうやってこのイエスさまのように、祈ることが出来るのでしょうか。このとき、眠っていた弟子たちです。目を閉じ、神さまを見つめることを止め、弱さに、罪に、身を委ねてしまった弟子たちです。この後、誘惑に、サタンに負けてしまって、イエスさまを裏切り、知らないと言い、逃げ出してしまった弟子たちです。そしてわたしたちも、この弟子たちと何が違うのでしょうか。

しかしイエスさまは、ここで「起きて祈っていなさい」と言われました。

「起きて」とは、眠っていることと反対に、目覚めているように、ということ。これまで

繰り返し言われてきた、「目を覚ましていなさい」ということですが、実はこの「起きる」という言葉もまた、先程の 45 節の「イエスが祈り終わって立ち上がり」の「立ち上がり」と同じ言葉なのです。それは「復活」「よみがえり」という意味もあると、先ほどお伝えしました。

起きて祈っていなさい。立ち上がって祈りなさい。わたしたちは、どこに立つのか。それは、祈って立ち上がられたイエスさま。そして、御心を成し遂げ、死者の中から立ち上がられたイエスさま。この復活のイエスさまに立って、わたしたちは祈るのです。

弟子たち、わたしたちには、立ち上がる力がありません。立つことさえ、祈ることさえ、わたしたちは自分の力で出来ないのです。

だからこそ、わたしたちは、祈りによって戦い抜き、立ち上がられたイエスさま。父なる神さまの御心に従って、怒りの杯を受け、わたしたちの罪を贖い、そして死者の中から立ち上がられたイエスさまによって、立たせていただき、祈るのです。

わたしたちは、このイエスさまの復活の命に立ってこそ。イエスさまが共にいて下さり、支えて下さり、生かして下さる、その確かな恵みの中に立ってこそ。父なる神さまが、本当にわたしたちを愛して下さる方であることを信じ、その良いご計画にすべてを委ね、その御心が行われるようにと、祈り願うことが出来るのです。熱心に祈り、誘惑に抵抗し、戦い抜くことが出来るのです。

「起きて祈っていなさい。」「わたしの復活の命によって立ち上がり、祈りなさい。」

わたしたちはイエスさまが成し遂げられた十字架と復活の御業によって、神さまの愛を示され、勝利を約束され、復活の命を保証されています。その確かさにあるからこそ。愛と、罪の赦しの中に立たされているからこそ。わたしたちは苦しみにあっても、悲しみにあっても、悩みにあっても、困難にあっても、「御心のままに行なってください」と祈り、立ち上がっていくことが出来るのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

御心のままに行なって下さい。わたしの思いよりも、あなたの思いこそ、はるかに正しく、愛に満ちた、良いものに違いありません。そのことを信じて、委ねる者とならせて下さい。

祈りによって、サタンに、誘惑に、打ち勝つことが出来ますように。復活のイエスさまの救いの恵みの中に立たせて下さり、あなたの罪の赦しを信じ、復活の命を信じ、ますます恵みへと近付けるように、わたしたちを祈る者とならせて下さい。

苦しみの時も、試練の時も、悲しみの果てにある時にも、喜びの時も、賛美が溢れる時も、何も感じないような時にも。起きて、目覚めて、立ち上がって、祈る者とならせて下さい。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 4 4 0 「備えて祈れ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 4 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン